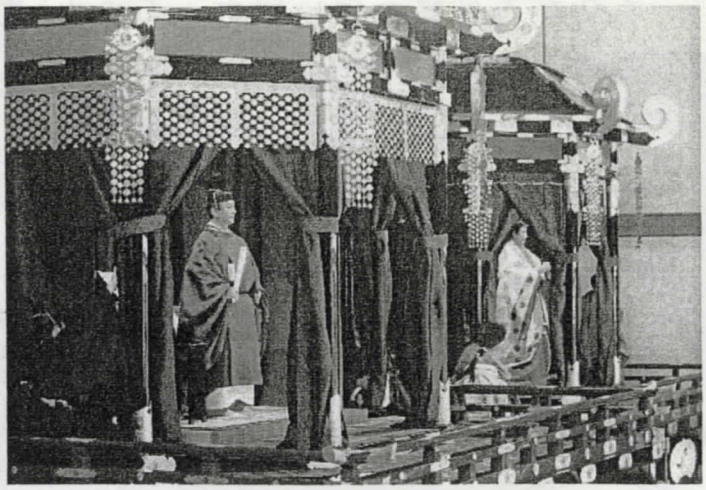
令和新報

第5号　令和元年十一月発刊
発行責任者　小山秀雄

五月二十二日
天皇陛下の即位礼正殿の儀



宮内庁より転載

天皇陛下の御言葉

さきに，日本国憲法及び皇室典範特例法の定めるところにより皇位を継承いたしました。ここに「即位礼正殿の儀」を行い，即位を内外に宣明いたします。

上皇陛下が三十年以上にわたる御在位の間，常に国民の幸せと世界の平和を願われ，いかなる時も国民と苦楽を共にされながら，その御心を御自身のお姿でお示しになってきたことに，改めて深く思いを致し，ここに，国民の幸せと世界の平和を常に願い，国民に寄り添いながら，憲法にのっとり，日本国及び日本国民統合の象徴としてのつとめを果たすことを誓います。

国民の叡智とたゆみない努力によって，我が国が一層の発展を遂げ，国際社会の友好と平和，人類の福祉と繁栄に寄与することを切に希望いたします。

勅を拝し奉り
聖上宣明あそばされると同時に、宮城上が晴れ、将しく天照大御神の御神意を拝し奉り、神恩、皇恩忝なく、感涙頻りとなりました。
ここに身命を賭して、神民、そして臣下として国体明徴に邁進する所存を心新たにした次第であります。
我々臣下が何を成すべきか、全てが我国の歴史に表れているように、我国の伝統文化を正しく継承、即ち、国体明徴あるのみと更に更に決意致しました。

大日本一誠会名誉会長
渡邊謙二先生古希祝い

十月二十六日渋谷区某所にて、大日本一誠会名誉会長、渡邊謙二先生の古希祝いが盛大に行われた。渡邊謙二先生は全日本愛國者團体會議（以下全愛とする）の議長を数年務められ民族派の重鎮である。私がこの民族運動に入り数年で全愛に加盟して御指導を賜わった。当時の大日本一誠会の会長は大塚稔先生で、元安藤組の幹部であった。関東協議会という全愛の中の関東地区を集めた協議会で毎月定例会があり、その定例会に於いて突然、大塚稔先生が「私の後を渡邊謙二に譲る」と三代目を指名したのであった。もう何年前か忘れたが昔の話である。今思うと歴史的な場面に立ち会えたものだ。

渡邊謙二先生には益々御指導賜わりたく、御自愛を心よりお祈り申し上げます。

日中民間交流外交

十月二十七日　新宿区歌舞伎町某所にて中国の社会科学院　日本研究所の方々とディスカッションを行った。

中国の方の研究の結果等の話から始まり、女性の研究員で〇〇〇〇〇さんは日本の右翼の研究者であった。

我々の「反日教育を辞めて下さい」中国「してません」我々「首相の靖國神社参拝の内政干渉はやめて下さい」中国「協定があり首相・官房長官・防衛大臣は靖国に行かない事になっています」との聞いた事の無い協定を持ちだした。とにかく日本は侵略戦争をしたのだから、反省をしろ、歴史をもっと勉強しろとのことだった。後半の質疑応答では色々な話が出たが、やはりかみ合う筈がなく、嘘で固めた歴史、教育で育った方々なのだな、と思った。大東亜聖戦(俗に第二次世界大戦という)を、侵略戦争と位置づけ、年に何十億もの ODA と称した金を恐喝し、賠償金は貰ってない、としている。

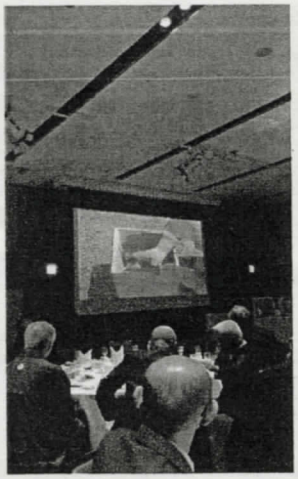
やはり今後も反中共を掲げて行こうと思った。

注・中国人を否定しているものではなく、中国共産党を否定しているものである。

青年思想研究会 先憂を偲ぶ会

十一月二日　上野の某所に於いて青年思想研究会の『先憂を偲ぶ会』が催された。例年この時期に行われるこの偲ぶ会は。誰もが知る、児玉誉士夫先生を始めとする先生方の偲ぶ会である。

先生方の挨拶があり、先憂に献杯を捧げ、会食となる。歓談中は青年思想研究会で昔撮ったビデオが放映された。今回放映されたビデオは、パラオ諸島にて遺骨収集をしているものであった。多くの隊員が泥まみれになり遺骨を掘っていたが、元病院のあった付近なので、かなりの遺骨を収集した。その後、茶毘にふした。何故この遺骨収集を政府はやらないのか、



だから我々がやらなければならないのか…　と思った。

私の伯父も終戦間際に召集され、レイテ島にて輸送船もろとも沈められた。一応遺骨は帰って来たが誰の遺骨かは分からない。私の母は嘆いていた。

その後

青年思想研究会に依って収集された遺骨は、靖國神社・千鳥ヶ淵墓苑に眠っている。

社会の不条理を糾す会

十月十九日土曜日　新宿西口にて社会の不条理を糾す会の東京演説会が正午より始まり十七時まで行われた。

社会の不条理を糾す会、初の試みとして、令和目安箱を設置し一般の方の意見を聞く事にした。

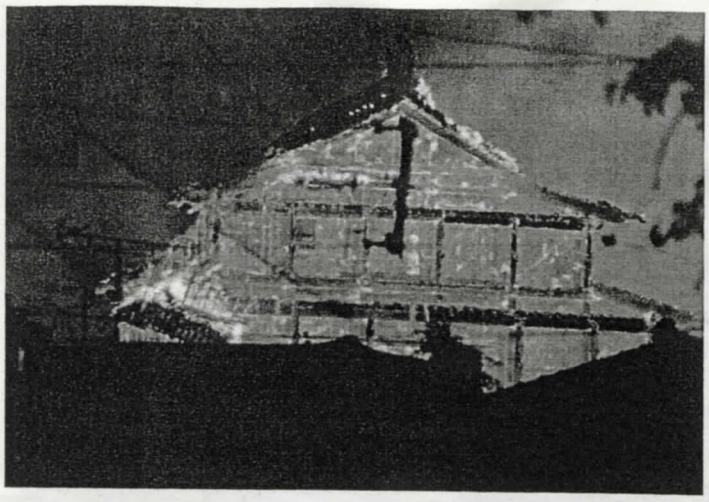
厳しい意見もあったが、激励の言葉が多かった。中には現金も入っていた。有難いことである。

目安箱の傍らに、令和新報を置き無料配布をしたが、一時間ほどでなくなった。私の作った新聞だけに批判が怖い。

首里城燃えゆ！

伝統文化を守る会
国賊天誅女子の会
安西愛美会長の寄稿です。

令和新報を御読みになっている皆さん始めまして。国賊天誅女子の会の安西愛美です。



今回は沖縄での首里城焼失を受けて特別寄稿をさせて頂きます。

実は短い間ではありましたが、私も沖縄で暮らしたことがあります。青い海に白い砂浜、一年を通しての暖かさに、まるで異国の様な建物。そしてそこに住む人たちの人柄はどこかゆったりとした時間の流れを生み、優しい空間を作り出してくれます。

そんな魅力に溢れ、今ではリゾート観光地として多くの人気を集める沖縄ですが、皆さんもよくご存知のように、大東亜戦争時には多くの国民が犠牲となった悲しみの地とも言えるのではないでしょうか。

一六〇九年に初めて日本の一部となり、一八七九年には沖縄県となりますが、その後もアメリカの一部となったり、日本に戻ったり……

琉球王国から日本、アメリカ、また日本へと、常に他国からの干渉を受けてきた色々な意味で特別な地、それが沖縄なのです。

こうした歴史の深さがあるせいなのか、沖縄の人々は郷土愛に溢れているように感じました。常に他国の干渉を受けながら、いかに琉球らしさを守り続けて行くのか、繰り返す破壊と構築の歴史の中で郷土愛という力を自然と身につけ、それらを守って来たのでしょう。

そして今でも老若男女が一般の生活の中で伝統や文化を愛し守りつづけています。

そんな中で今回琉球王朝の象徴である首里城がまた焼失してしまいました。私は彼らがどんなに自分達の伝統や文化を大切に守って来たかを見ました。

だからこそ、燃えさかる城を見つめる人の姿を見て涙がこぼれました。

彼らがあんなにも愛したものは、ものの数時間で、神のいる正殿までをも焼きつくされてしまいました。

火につつまれる城を見て戦火の沖縄が頭に浮かびました。

一体、何度破壊による悲しみを乗り越えればよいのか。

よく左翼陣営が使う常套句として、沖縄の海を守れ、その為に米軍は出て行け、ということが騒がれます。

とある代議士と沖縄視察へ訪れた際にも、沖縄の海を守る為に米軍基地への反対をすると言っていました。

しかし、海を守ることだけが、海だけが沖縄や日本の伝統、文化なのでしょうか？

私にとっては、経済効果の為に伝統的な古い建物を壊し、建設ラッシュを進めることの方が、沖縄の破壊を手伝っているのではないかと思います。

破壊というのは本当に簡単で単純なことですね。私の家の前でも古い家の解体工事が始まり、三日後には見事に土しか残っていませんでした。何日か前までそこにあったのは、ただの古ぼけた家屋ではなく、歴史だったんだという事を、一体どれ程の人が気付いているのか。あの工事の音は私にとって、歴史を壊す音にも聞こえます。大きな音をたてながら無くなっていく歴史、悲しいものですね。

身近な所でもこういうふうに少しずつ歴史や伝統文化の破壊が行われているんですね。新しく綺麗なものが正義であって、古いものは必要のない汚いものなのか？

私は、あの火災を見て守りたい物が壊れる哀しさと怖さを感じました。自分達で自分達の伝統文化を守らなければ、日本は日本でなくなってしまいます。

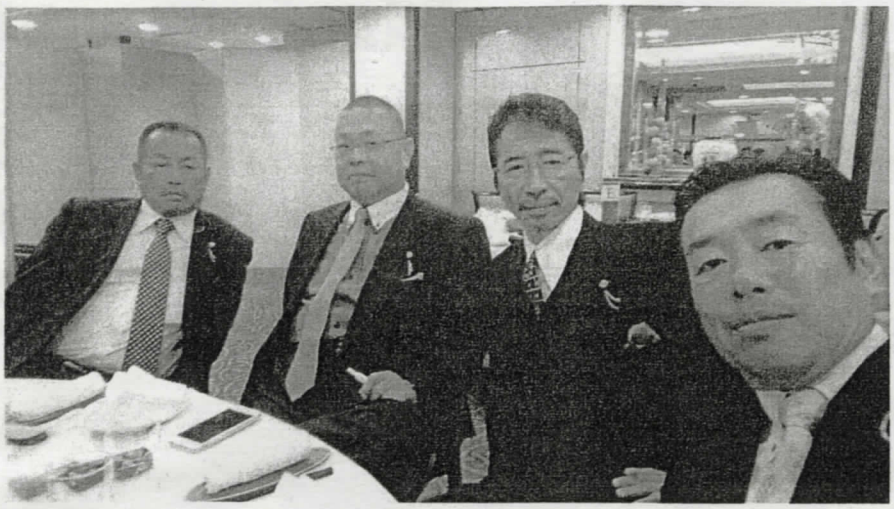
今、私達に出来ることは何でしょうか？

私達も沖縄の人を見習って、古き良きものを守り伝えて行く、そんな心を持てればいいのになとふとそんなことを考えさせられた今回の首里城の火災でした。

最後になりましたが、全ての沖縄県民にまた笑顔が戻りますように。

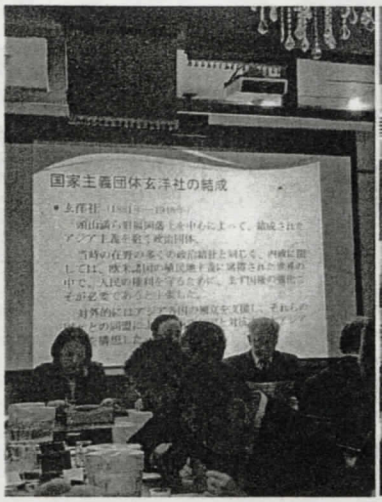
ガンバレ琉球！

國民協議会執行部の面々

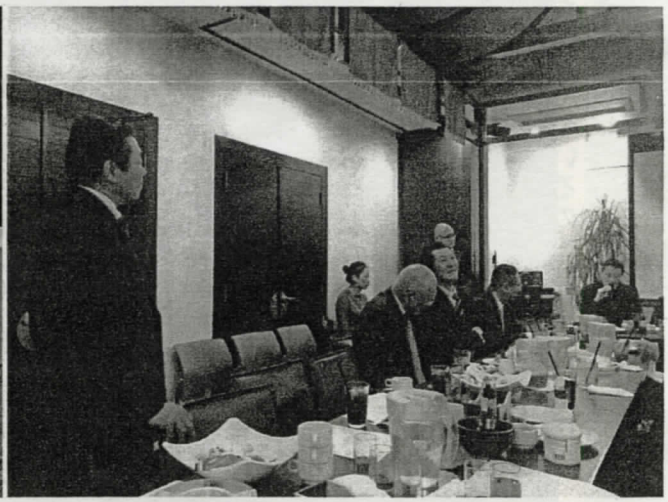


古希祝いにて花束贈呈

日中民間交流外交



青年思想研究会先憂を偲ぶ会



先憂に献花
清水政男議長
阿形充規名誉顧問